

國學院大學學術情報リポジトリ

On the Estimating Usage of kiku in Konjaku Monogatari-shu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kondo, Masayuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000070

「聞く」の推定用法

— 今昔物語集を中心に —

一 はじめに

今昔物語集に次のような例がある。

(1) 内ノ音不許スシテ、外ノ鬼a乍歎ラ返ヌ、ト聞テ、
ト聞ク。b

(卷十二の二十八)

(2) 其ノ後、俄ニ大風吹テ、大ナル木倒レヌ、ト聞ク。a

(卷十三の十八)

近藤政行

日本古典文学全集本は、(1) について「書生は穴の中に居るので、物音やけはいでそれと察したのである」(二九〇ページ)、(2) について「盲僧なので、音をたよりにそれと推定したわけである」(四〇三ページ)と注している。つまり、これらは音によって傍線部 a の出来事を推定したもので、その推定を表しているのが傍線部 b の「聞ク」であるというわけである。本稿は、このような、引用句を受けて推定を表わす「聞く」を「推定用法の「聞く」と呼ぶことにする。

推定用法の「聞く」(以下、「推定キク」と記す)の例は今昔物語集のほかにも、

(3) 車の音ごとに胸つぶる。夜よきほどにて、みな帰る音も聞ゆ。門のもとよりもあまた追ひちらしつつ行くを、過ぎぬと聞くと心に心は動く。

(蜻蛉日記 中巻 天禄二年 217)

のように見られるのであるが、本稿では、結果として推定キクが比較的多く見られた今昔物語集(全部で15)を中心に考察し、推定「なり」^①との相違についても考えたいと思う。テキストは日本古典文学大系本を用いた。^②

二 推定キクの用例

推定キクについて考察するにあたり、推定「なり」の意味分類を参照したい。

岡崎正繼氏は次のように説明している。^③

- ① 音・声が増えてくる意、または、聞えてくるやうだといふ意を表す。……方聞エル。……ヤウダ。
 (4) ある者ども、「この乾の方に火なん見ゆる。門出でて

見よ」などいふなれば、「もろこしぞ」などいふなり。
 (蜻蛉日記 下巻 天禄三年 294)

② 音・声・話(主として相手の話)などによって推定する意を表す。……ヤウダ。……ヤウダナ。……ヤウダネ。

(5) 明くれば、二月にもなりぬめり。雨いとどかに降るなり。
 (蜻蛉日記 下巻 天禄三年 273)

(6) かぐや姫、……「いそのかみの中納言には、つばくらめのもたる子安の貝ひとつとりて給へ」といふ。翁、「かたき事どもにこそあなれ。……」

(竹取物語 24)

本稿はこれによりながら、②を、

- ③ 音・声によって推定する意を表す。用例は(5)
 ④ 相手の話によって推定する意を表す。用例は(6)

のように二分したいと思う。③は音によってその発生源となる「雨いとどかに降る」という出来事が推定されるのであり、この「雨いとどかに降る」がそうであるように、「なり」に上接する文は動詞文である。これに対し、④は出来事を述べる

ものではなく、相手の話を前提として、そこから帰結される「かたきことどもにこそあなれ」という事柄を述べるものであって、この場合の「なり」に上接する文は、

(7) 「すべていみじう侍り。さらにまだ見ぬ骨のさまなりとなん人々申す。まことにかばかりのは見えざりつ」と言たかくのたまえば、「さては、扇にはあらで、海月のななり」ときこゆれば、

(枕草子 九八段 196)

(8) 「…もし我におくれてその心ざしとげず、この思ひおきつる宿世がはば、海に入りね」と、常にゆいごし置きて侍るなる」と聞ゆれば、君もをかしと聞き給ふ。人々、「海龍王の后になるべきいつき女ななり。心だかさ苦しや」

(源氏 若紫 154)

(9) 「ここにももし給ふは誰にか。尋ね聞えまほしき夢を、見給へしかな。今日なん思ひ合せつる」と聞え給へば、うち笑ひて、「うちつけなる御夢語にぞ侍るなら。…」

(源氏 若紫 160)

のように、名詞文である。

「音・声」か「相手の話」とかという推定のよりどころの違いが、推定される内容そして「なり」に上接する文の違いに対応するのであるから、③と④を区別する意味はあるといえよう。以下、説明をわかりやすくするため、①③④それぞれに便宜的な名称をつきたい。すなわち①を聞音②を出来事推定③を事柄推定と呼ぶことにする。

表1・2に、推定キクとあとで比較する推定「なり」の使用状況をまとめた。両者とも本朝の部を中心に用いられている。推定キクは世俗よりも仏法に多いが、これは文体の違いではなく、説話の内容が関係していると思われる。仏法には僧が多く登場し、その僧が盲僧であったり、闇夜にある出来事に遭遇するといった類話が少なくないからである。

推定キクの例を示す。推定キクには聞音と事柄推定の例は見いだされず、出来事推定の例(15例)のみのようである。

(10) 暁二成ル程二、道祖返来ヌト聞ク程二、

(卷十三の三十四 253)

(11) 而ル間、鬼、仏壇ノ前二倒レヌト聞ク。

(卷十七の四十二 565)

(12) 人ノ足音シテ、我が寝タル傍ノ桧垣ニ立副ヌト聞ケル二、

(卷二十九の十二 159)

卷	推定「なり」			推定キク			
	会話文	地の文	小計	会話文	地の文	小計	
1			5			0	
2							
3	2						
4		1					
5	1						
6							
7							
9							
10	1						
11	2	1		20			
12					2		
13					3		
14	1						
15		5					
16	3	2					
17	1				3		
19		1			2		
20	4						
22			46				4
23		1					
24	1	1			1		
25	2	1			1		
26	6						
27	2	9			1		
28	4	3					
29	6	2			1	1	
30	1						
31	5	2					
合計	42	29		1	14		

表1 巻別用例数

		推定「なり」		推定キク	
		会話文	地の文	会話文	地の文
天竺・震旦	聞音		1		
	出来事推定				
	事柄推定	4			
	小計	4	1	0	0
本朝仏法	聞音		6		
	出来事推定	1	3		10
	事柄推定	10			
	小計	11	9	0	10
本朝世俗	聞音	2	14		
	出来事推定	2	5	1	4
	事柄推定	23			
	小計	27	19	1	4
合計		42	29	1	14

表2 意味別の用例数

(13) 鬼、其ノ跡ニ来テ云ク、「何ヲ、此ニ有リツル奴ハ」ト。鬼来ヌト聞ク程ニ、(卷十二の二十八 172) これらは音や声が聞こえた場合の例であるが、次のように音が聞こえてこなかった場合の例も見られる。

(14) 此ノ童、起居テ云、「我レ、今三年、此ノ主ノ為ニ被仕テ可被打責カリツレドモ、今、此ノ宿レル僧ニ値ヒ奉ヌレバ、只今、外へ行ヌ」ト云テ、外ニ出ツトモ不聞テ搔消ツ様ニ失ヌ。(卷十七の一 505)

(15) (僧は) 可云キ事ナド云ヒ置テ、死ナムズル所ニ行テ、独リ居テ念仏唱ヘテ居タリ。終夜傍ノ人聞ケドモ、忽ニ死ヌトモ不聞ヌニ、既ニ夜明ヌ。(卷十九の二十四 11)

なお、音が聞こえなかった場合の例は、

(16) 傍なる所に、さきおふ車とまりて、「萩の葉、萩の葉」とよばすれど答へざなり。(更級日記 303)

のように、推定「なり」にも例がある。以上の用例から、推定キクは出来事の成立または不成立を音や声で確認しているということになる。

三 引用句を受ける「聞く」の用法

このような推定キクは、引用句を受ける「聞く」の中でどのような位置にあるのだろうか。

まず、引用句を受ける「聞く」の用法は次のように分けられる。

A 他から聞いたことを述べる。

(17) 東ヨリ馬将来タリト聞ツルヲ、我レハ未タ不見ズ。

(卷二十五の十二 392)

(18) 豊楽院ニハ人謀ル狐有リト聞ク。

(卷二十七の三十八 531)

B ……と違って聞く、聞き耳を立てる。

(19) 然テ走り去テ、「亦ヤ人ヤ有ル」ト聞ケレドモ、音モ無カリケレバ、走廻テ、中門ノ御門ニ入テ柱ニ搔副テ

立テ、 (卷二十三の十五 250)

(20) 主・従ノ者次第第二入ルニ、「先我ヲ呼立ムズラム」ト
聞ニ、 (卷二十六の十四 452)

(21) 人ノ、藏ノ辺ヲ過ケルニ、藏ノ内ニ叩ク者有リ。「何
ノ叩クゾ」ト聞ケレバ、藏ノ内ニシテ云ハク、
(卷二十九の十 156)

(22) 何処ニ入ラムズル盗人ニカアラムト聞ケバ、「筑後ノ
前司」ナド云ヘバ、
(卷二十九の十二 156)

(20) は期待をもつて聞き、(21) (22) は何らかの情報を得
ようとして聞いているのである。

C 聞いて…と思う。

(23) 清範、其ノ講師トシテ、龍女ガ成仏ノ由ヲ説キケル
ニ、実ニ聞ク人モ、涙ヲ流テ、哀レ也ト聞ケルニ、
(卷十三の四十三 267)

(24) 「何ノ男ニカ有ラム」ト思フ程ニ、車ノ共ナル雑色共
ノ云ク、「彼ノ男ノ敵ニテ、切殺レタルトナム申ス」
ト云ケレバ、則光糸喜シト聞クニ、
(卷二十三の十五 251)

(25) 男ノ叫テ云様、「此辺ノ下人承ハレ。明旦ノ卯時ニ、

切口三寸・長サ五尺ノ晷預、各一筋ヅ、持參レ」ト云
也ケリ。奇異クモ云哉ト聞テ、寝入ヌ。
(今昔 卷26—17 四六二)

このうちのCが推定キクと関係があるように見えるが、両者
には明らかな違いが認められる。

Cの引用句は、耳にした事柄に対する感想ないしは批評を述
べているのであって、文の種類も「品定め文」である。もつと
も、

(26) 伊衡、此レヲ聞クニ、世ニハ此ル人モ有ケリト聞
ク。
(卷二十四の三十一 324)

のように、気づきまたは詠嘆の意味を表す「けり」の付いた文
あるので、Cの「聞く」は感想や批評を述べる主体的表現を受
けるといふべきだろう。

一方、推定キクの引用句は用例(1)(2)のほか、

(27) 曉ニ成ル程ニ、道祖返来ヌト聞ケル程ニ、(10)

- (28) 而ル間、鬼、仏壇ノ前ニ倒レヌト聞ク。(|| 11)
 (29) 人ノ足音シテ、我ガ寝タル傍ノ檢垣ニ立副ヌト聞ケルニ、(|| 12)
 (30) 鬼、其ノ跡ニ来テ云ク、「何ラ、此ニ有リツル奴ハ」ト。鬼来ヌト聞ク程ニ、(|| 13)

のように、いずれも出来事を述べているもので、「物語文」⁶である。引用句中の文の性質が異なるという点から考えて、推定キクはCとは別の用法と見るべきだろう。ここで、「聞く」に次のような例があるのに注目したい。

- (31) (鬼は) 我ヲ不求ズシテ、先ツ馬ヲ噉ス。書生此レヲ聞クニモ、「馬ヲ噉ヒハテナバ、我ガ身ヲ噉ハム事ハ疑ヒ無シ。此ノ穴ニ入テ有ラバ不知ニヤ有ルラム」
 (卷十二の二十八 172)
 (32) 鬼、老僧ヲ既ニ食ハテテ、亦、若キ僧ノ有ツル所へ来ル。僧、此レヲ聞クニ、東西思ユル事無クシテ、
 (卷十七の四十二 565)

「此レ」が指しているのは発話ではなく音である。音を聞く

と同時にそれが何の音であるかは分かるはずであるから、「聞く」には「聞いてそれと知る」という意があると考えられ、そのような「聞く」が、音で引用句に示した出来事を知ったという表現を構成したのが推定キクであると考えられる。

四 推定「なり」の用例

推定「なり」(全用例数71例)がどのように用いられているかを会話文(心内文も含む)と地の文とに分けて述べていく。(表2参照)

「会話文に用いられた例」 42例

a 聞音(2例)

- (33) 守ノ叫テ物云フ音、遙ニ遠ク聞ユレバ、「其ノ、物ハ宣フナルハ。：」
 (卷二十八の三十八 117)
 (34) 「今ハ引上ヨ」ト云フ音聞ユレバ、「其ハ引ケト有ナルハ」(卷二十八の三十八 117)

b 出来事推定(3例)

- (35) 「穴極ジ。震旦ノ天狗被擲ヌナリ」
 (卷二十の二 147)

(36) 人ノ足音数シテ来ナリト聞程ニ、

(卷二十六の九 440)

(37) 未下ル程ニ、南殿ノ方ヨリ歌ヒ啞テ来ル音ス。「ソツ

来ニタナリ」 (卷二十八の四 62)

c 事柄推定 (37例)

(38) 入道、此ヲ聞テ云ク、「其レハ、極テ悪キ事ニコソ侍ナレ。」 (卷二十四の四十四 213)

(39) 兄「然々ノ事ナム有ル」ト語ケレバ、弟「希有ナル事ニコソ侍ナレ。」 (卷二七の三四 525)

(40) 「畳ノ裏トハ城下ト云フ所ヲコソ、古ヘ旧事ニ申タレ」ト云ケレバ、少将、此ヲ聞テ、心ノ内ニ喜ビ思テ、「然テハ其二住ム人ナナリ」ト心得テ、 (卷三十の六 230)

会話文で用いられる推定「なり」全42例の内、事柄推定の意味で用いられるものが37例と最も多く88%を占める。

「地の文に用いられた例」 29例

a 聞音 (21例)

(41) 鬼共過グトテ云ナル様、「此ニ氣ハヒコソスレ。彼レ

搦メ候ハム」ト云テ、 (卷十四の四十二 336)

(42) 亦、女追々フ、「イデ、其ノ子返シ令得ヨ」ト云ナリ。 (卷二十七の四十三 540)

(43) 大路ニ女ノ音ニテ「引剥有ニ、人殺スヤ」ト叫ブナリ。 (卷二十三の十六 253)

(44) 亦、何ナレバ然ルゾト問フナレバ、 (卷十四の四十二 336)

(45) 亦、兎ノ音ニテ、イカイカト哭クナリ。 (卷二十七の四十三 540)

(46) 「射ヨ、彼レヤ」ト云ケル言モ未ダ不終ニ、弓ノ音スナリ。 (卷二十五の十二 394)

このうち (41) から (45) のように発話を引用する箇所に使われたものが15例を占める。それを整理すると、次のようである。

1 云ナル様…7例

2 ト云フナリ…3例

3 ト叫ブナリ、ト哭ナリ…3例

4 何ニト問フナレバの類…2例

これらは「云ふ」「叫ぶ」「哭く」という動作よりも、聞えてきた発話を示すところに主眼があると思われる。

また、動作に伴う音や発話を示しつつ表現した、

(47) 目ヲ不見開ネバ、慥ニ何者トハ不見ズ、大キヤカナル者板敷ニトウト着ヌナリ。 (巻27—35 526)

(48) 九月ノ下ツ暗ノ比ナレバ、ツ、暗ナルニ、季武、河ヲサフリサフリト渡ルナリ。 (巻27—43 540)

(49) 然レバ、女、「此レハ、クハ」トテ取ラスナリ。 (巻二十七の四十三 540)

(50) 音モ不為テ曲マリ居タレバ、此ノ物近ク来テ、先ツ物ヲハクト下シ置クナリ。 (巻28—44 127)

なども(4例)、推定のよりどころとなる具体的な音や発話を明示しようとしたと考えられるので聞音の例に含めた。

b 出来事推定 (8例)

(51) 者一人走り係テ来ナリ。 (巻十四の四十二 336)

(52) 入来テ、此ノ家主ノ女房ト物語ナド打シテ、二人臥

スナリ。 (巻三十一の十四 275)

(53) 近クモ不寄来ズシテ走り返ヌナリ。 (巻十四の四十二 336)

(54) 「然也」ト答フレバ、寄来ヌナリ。 (巻二十九の十二 159)

c 事柄推定 該当する例なし。

地の文の推定「なり」は聞音の意味で用いられているものが72・4%を占める(聞音に含めた47から50の用例を除けば58・6%)。大体において、会話文と地の文とで「なり」の用法が対照的である。

なお、推定「なり」が世俗に多いことについては、用例(34)から(36)のような事柄推定が仏法の倍以上用いられ、用例(40)から(45)のような聞音の用例数が仏法のそれを上回っていることから、世俗が仏法よりも会話文を多用していることと関係していると思われる。

五 説話の叙述からの比較

以上に見たところから、推定「なり」と推定キクとの比較は

地の文の場合について行うことになる。そして、本稿は両者の特徴を明らかにするには説話の叙述という観点から行うのが有効であると判断した。

まず、推定「なり」にどのような特徴が認められるか。

推定「なり」は主体的表現であるから、会話文に用いられたときには、推定する主体は話し手であるが、これが地の文に用いられたときには、元は登場人物による推定であるはずのものが説話の記者による推定になってしまう。あるいは、説話の記者が登場人物の立場で推定していると見るべき表現になつてしまふ。しかし、そのいずれにせよ、地の文に用いられた推定「なり」は、推定された内容つまり、一つの出来事をそこにさうしてあるものとして示すものと化している。これは結局、「なり」によって音に基づく情景描写が行われているのにはほかならない。

推定「なり」は情景描写を行うがゆえに、ある特徴を有する。それは複数を連続的でないしは集中的に用いることができるといふことである。

たとえば、「頼光の郎等、平季武、産女に値ふ語」(巻二十七の四十三)は7例の推定「なり」が用いられており、一つの説話に用いられた推定「なり」の用例数として最多であるが、そ

のすべてが、季武と産女とのやり取りを描く場面に用いられている。また、「尊勝陀羅尼の験力に依りて鬼の難を遁れたる語」(巻十四の四十二)では、鬼たちが常行を捕えようと何度も試みる場面に5例の推定「なり」が用いられている。少々長いが前者の例を引用する。

(55) 九月ノ下ツ暗ノ比ナレバ、ツツ暗ナルニ、季武、河

ヲサフリサフリト渡ルナリ。既ニ彼方ニ渡リ着ヌ。此レ等ハ河ヨリ此方ノ薄ノ中ニ隠レ居テ聞ケバ、季武、彼方ニ渡リ着テ、行滕走り打テ、箭拔テ差ニヤ有ラム、暫許有テ、亦取テ返シテ渡リ来ナリ。其二度聞ケバ、河中ノ程ニテ、女ノ音ニテ、季武ニ現ニ「此レ抱ケケ」ト云ナリ、亦兎ノ音ニテ、イカイカト哭ナリ。其ノ間、生臭キ香、河ヨリ此方マデ薰ジタリ。三人有ルダニモ、頭毛太リテ怖シキ事限り無シ。何況ヤ、渡ラム人ヲ思フニ、我が身乍モ半ハ死タル心地ス。然レテ、季武ガ云ナル様、「イデ抱カム、已」ト。然レバ、女、「此レハ、クハ」トテ取ラスナリ。季武、袖ノ上ニ子ヲ受取テケレバ、亦、女追追フ、「イデ、其ノ子返シ令得ヨ」ト云ナリ。

(卷二十七の四十三 540)

このようなまとまった使用例が見られるのが推定「なり」の特徴である。これは単に用例数が多いということではなく、音に基づく情景描写の当然の結果である。

一方、推定キタは特定の登場人物が一つの出来事を確認するところに力点を置く。そして、その出来事は登場人物にとつて、または説話の構成にとつて重要な意味を持つ。

たとえば、「筑前の前司源忠理の家に入りたる盗人の語」(卷二十九の十二)では、方違えをした忠理が夜中に「人ノ足音シテ、我が寝タル傍ノ捨垣ニ立副ヌト聞」くが、それは忠理の家に盗みに入ろうと計画している者たちだった。忠理はその計画を事前に知ることにより被害をまぬかれるのである。また、「鎮西武蔵寺にして翁出家の語」(卷十九の十二)は一人の僧が「馬ノ足音数シテ人多過ゲト聞」くところから始まり、その馬に乗った者たちが告げた通り、「年七八十許ナル翁」の出家に会おうのである。忠理と僧が「聞く」ということが説話として発端になっており、忠理と僧が「聞く」からこそ説話が成立しているとも言えるのである。

さらに「但馬国ノ古寺ニシテ毘沙門、牛頭ノ鬼ヲ伏シテ僧ヲ

助ケタル語」(卷十七の四十二)は、既に老僧を食い殺した鬼が自分に迫ろうとしたので、一体の仏にしがみつき心の中で経をとなえていると「鬼、仏壇ノ前ニ倒レヌト聞ク」。夜が明けて、僧は自分しがみついていた仏は毘沙門天であり、「我ヲ助ケムガ為ニ、毘沙門天ノ差シ殺シ給ヘル也ケリ」と知るのである。

「信濃ノ国ノ盲僧、法花ヲ誦シテ両眼ヲ開キタル語」(卷十三の十八)は、一人残されて四か月になる盲僧が飢えと寒さに耐えかねていたところ、「我レ、汝ヲ助ケムト云テ菓子ヲ与フ」という夢を見る。「其ノ後、俄ニ大風吹テ、大ナル木倒レヌト聞」いた僧は倒れた木の実を食べて飢えを満たし、枝を燃料として冬の寒さをしのいだ。木が倒れたのを「此レ偏ニ、法花経ノ験力也」と知った僧はいよいよ法花経を説誦し、「遂ニ両眼開ヌ」となるのである。

ところで、「地藏菩薩ノ変化ニ値遇セント願フ僧ノ語」(卷十七の一)には、

(56) 此ノ童、起居テ云、「我レ、今三年、此ノ主ノ為ニ被仕テ可被打責カリツレドモ、今、此ノ宿レル僧ニ値ヒ奉ヌレバ、只今、外へ行ヌ」ト云テ、外ニ出ツトモ不

聞テ掻消ツ様ニ失ヌ。

(卷十七の一 505)

という例があり、この後にも、

(57) 亦、嬬、外ニ出ツトモ不聞テ忽ニ失ニケリ。(同)

という例がある。姿の消え方が「外に出て行った様子がない」というものだからこそ、僧は「実ニ此レ地藏ノ化身也ケリ」と知ったのである。これなどは外に出ていないことを確認しているところに意味があるわけで、そこに推定キクが用いられているのである。

先の、卷二十九の十二と卷十九の十二については、その「聞」いた後の叙述に注意したいことがある。まず「人ノ足音シテ、我が寝タル傍ノ捨垣ニ立副ヌト聞」いたり、「馬ノ足音数シテ人多過クト聞」いたときには、それが何者であるか、何をしようとしているのかをうかがおうと耳をすまし、その者たちのやり取りを聞き取るといふ行動に出るが、そのやり取りを語り終わるところに推定「なり」が使われるのである。卷十九の十二では、

(58) 「然バ明日ノ巳時許ノ事ナル、必參リ給ヘ。待申サム」ト云テ過ヌナリ。(卷十九の十二 89)

となっており、卷二十九の十二では、中間に、

(59) 「何主ノ坐スルカ」ト云フ。「然也」ト答フレバ、寄来ヌナリ。(卷二十九の十二 159)

という一文をはさむが、盗みの計画をとりかわした後には、

(60) 「然ラバ明後日何主ヲ具シテ必ズ坐シ會ヘ」ナド契テ、歩ビ別レテ去ヌナリ。(卷二十九の十二 159)

のように「なり」で終わっている。すなわち、説話の叙述としては、何者かの登場には推定キクを、退場には推定「なり」を用いているのである。⁸⁾

以上のように、説話の叙述という観点からみると、推定「なり」には音に基づく情景描写、推定キクには説話の構成にとって重要となる出来事の確認という特徴のあることが認められるのである。

六 まとめ

本稿が述べたことをまとめる。

- (一) 推定キクすなわち、引用句を受けて推定を表す「聞く」は、「聞いてそれと知る」という意の「聞く」を用い、音で引用句の出来事を知ったという表現を構成したものである。
- (二) このような「聞く」の用法は、「聞いて……と思う」という意味を表す「聞く」とは別のものと見なされる。
- (三) 推定「なり」と推定キクとの比較は地の文に限定されるが、ともに音に基づく判断であるものの、推定「なり」が情景描写を行うものとなっているのに対し、推定キクは特定の主体が出来事の確認を行うものである。
- (四) 推定キクは主体が明らかであるため、これを説話の叙述に用いて特定の人物による出来事の確認というかたちをとることで、説話構成上の重要な部分となすことができる。

以上のようなのである。

注

- (1) 本稿では、推定伝聞の助動詞「なり」が推定の意味を表しているものを「推定『なり』」と呼ぶことにする。
- (2) 他の資料については、源氏物語は『源氏物語大成』、それ以外は新編日本古典文学全集本によった。
- (3) 岡崎正繼「推定伝聞の助動詞『なり』について―その承接と意味―」(『国学院雑誌』九十卷三号、一九八九年)なお、用例も岡崎氏が示しているものの一部を新編日本古典文学全集本によって示す。
- (4) 注3の岡崎氏論文による。
- (5)・(6) 佐久間鼎『日本語の特質』くろしお出版、一九九五年復刊(育英書院、一九四一年初版)一五一ページ以下参照。
- (7) 大系本『今昔物語集』第四冊の解説参照。
- (8) 卷十九の十二と同話の宇治拾遺物語(卷十一の十二)にも「馬の足音あまたして、人の過ぐると聞く程に」(358)と推定キクが用いられているが、鬼神と道祖神とのやり取りを述べる箇所「答ふなり・問ふなれば・いふなれば」のように推定「なり」を用い、締めくくる箇所には用いていない。何者かの登場に推定キクを用いる点は共通しているようである。